第二言語としての日本語動詞句の記憶に及ぼす被験者実演課題の効果

—動詞の種類による検討—

○中原 郷子

(九州大学留学生センター)

キーワード: SPT, 動作化困難動詞句, 動作化容易動詞句

Effects of Subject-performed Tasks on Memory of Verbal Phrases in Japanese as a Second Language

Satoko NAKAHARA

(Kyushu University International Student Center)

Key Words: SPT, abstract verbal phrases, concrete verbal phrases

目 的

これまでの SPT (subject-performed tasks: 被験者実演課題) 研究で, 動作化が容易な動詞を含む動詞句を用いた SPT 効果の検討は行われたが (e.g., Cohen, 1981), 具体的動作の想起が困難な動詞を含む動詞句については検討が行われていない。しかし, 第二言語 (以下, L2 とする) としての日本語学習の初期段階から, 非動作動詞は多く導入されるため, 非動作動詞の記憶に有効な手段を探ることは, L2 としての日本語教育において重要であると考えられる。本研究では, 日本語を L2 とする学習者を対象に, 動作化が難しい材料を用いた場合にも, SPT 効果がみられるか否かを検討することを目的とした。

方 法

<実験参加者> 中国語, 台湾語, 韓国語を母語とする上級の日本語学習者 36 名で, 全員が実験時, 旧日本語能力試験 1 級を取得済みであった。**<実験計画>** 3×2 の 2 要因配置であった。第 1 の要因は符号化課題の種類で, SPT 条件, IT 条件, VT 条件の 3 水準であった。第 2 の要因は動詞の動作化難易度で, 困難群と容易群の 2 水準であった。第 1 の水準は参加者間要因であり, 第 2 の要因は参加者内要因であった。**<材料>** 『みんなの日本語 初級 1 本冊, 初級 2 本冊』(スリーエーネットワーク, 1998a, 1998b) で学習する動詞, 名詞を参考にし, 『日本語能力試験出題基準 改訂版』(日本国際教育協会・国際交流基金, 2002) の旧日本語能力試験 3, 4 級の動詞を用いて動詞句を作成した。72 の動詞句は母語話者及び上級の日本語学習者を対象とした調査を経て動作化難易度の高低によって 12 項目ずつの 2 リストに分けられた。**<手続き>** 個別実験であった。参加者は 3 つの符号化課題からランダムに選ばれた 1 つの符号化課題を行った。視覚呈示される動詞句を一度, 音読した後に, SPT 条件では動詞句が表す内容を動作で実際に, 着席したまま行うこと, IT 条件では絵に描くこと, VT 条件では動詞句をそのまま紙に書き写すことが求められた。符号化課題後, 語句の自由再生テストが行われた。すべての課題終了後に, 未知単語の有無, 日本語学習歴, 母語について質問された。

結 果

自由再生された日本語動詞句をもとに, 3×2 の 2 要因分散分析を行なった結果, 符号化課題の種類の主効果が有意であった ($F(2, 33)=8.95, p<.001, \eta^2=.26$)。Ryan 法による多重比較を行ったところ, (a) SPT が VT よりも再生成績が高いこと, (b) SPT と IT の間では再生成績に差がないこと, (c) IT が VT よりも再生成績が高いことが明らかとなった。また, 動作化難易度の主効果 ($F(1, 33)=0.76, p=.389, \eta^2=.01$) 及び符号化課題の種類×動作化難易度の交互作用は有意ではなかった ($F(2, 33)=0.65, p=.530, \eta^2=.01$)。

考 察

SPT が VT より高い再生成績を示したことから, L2 でも,

母語同様, 動詞句を言語的にのみ符号化するより, 動作を伴った方が, 後の検索に有効であることが明らかになった。また, IT が VT より高い再生成績を示したことから, IT ではイメージを用いるため, それだけ VT より検索時の手がかりが多くなり, 再生成績が高くなったと考えられる。SPT と IT の再生成績に差が見られなかったことについては, SPT の再生成績が, IT と差が出るほどには上がらなかったことが考えられる。SPT では動作を行ったため, IT よりも記憶痕跡が強くなると考えられるが, 動作によって喚起された運動情報が後の検索で, 利用できなかった可能性がある。その理由としては, リスト内の項目の多さが挙げられる。つまり, 呈示される項目が多かったため, 動詞句自体の記憶に認知負荷がかかり, 符号化課題の違いによる記憶成績の差が生じなかった可能性が考えられる。

動作化難易度について, 困難群と容易群で再生成績に違いが示されなかった。呈示された動詞句をどう動作化するかという運動プランニングの難易度は再生成績に影響を与えないことが明らかになり, 運動プランニングが困難な動詞句であっても, 容易な動詞句と同程度に記憶, 再生することが可能であることが明らかになった。

3 つの符号化課題の種類で動作化の難易度による再生成績の差が見られなかったことから, SPT の記憶向上に重要なのは, 動作の実行ではなく, 運動プランニングであることが示された。同じく非言語的符号化を行った IT では, 視覚イメージ化に動作化の難易度は影響を及ぼさないことが示唆された。分散分析における交互作用は有意ではなかったが, 再生得点自体を比較すると, 困難群においても, 容易群においても, SPT, IT の再生得点が VT よりも高かったことから, 動作化が困難な動詞句でも, 容易な動詞句でも, 安定して VT に対する SPT 効果が生じることと, イメージによる符号化が VT より, 後の検索に効果的であることを示している。

以上を踏まえると, 本研究の結果, L2 としての日本語教育において, 非言語化が困難な動詞であっても, 動作やイメージを用いようとして運動プランニングを行なうだけでも記憶痕跡が強くなり, 覚えやすく, 思い出しやすくなる可能性があることが示唆された。

引用文献

Cohen, R. L. (1981). On the generality of some memory laws.

Scandinavian Journal of Psychology, 22, 267-281.

スリーエーネットワーク (1998a). みんなの日本語初級 1 本冊 スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク (1998b). みんなの日本語初級 2 本冊 スリーエーネットワーク.

日本国際教育協会・国際交流基金 (2002). 日本語能力試験出題基準 改訂版 凡人社.